

# イスラエル アンベールド Vol.1 「断崖の山」



英語版オリジナル 2017年1月27日公開:

Israel Unveiled Vol 1: Mt. Precipice

<https://youtu.be/u7tu0teluaw>

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

ここは断崖の山の頂上です。私が座っているのは、ナザレの町に隣接する崖の横、海拔約1300フィート（396m）の場所です。ナザレの町の付近にある断崖と言え、ここしかありません。そこで当然思い出されるのは、ルカの福音書4章の話です。イエスがナザレの会堂で語られた時のことです。人々は、イエスの言われた事に不満だったので、ちょうどこの場所までイエスを連れてきて、あの崖から突き落とそうとしました。ここで起こった事を本当に理解するためには、なぜナザレだったのかを理解しなければなりません。

この場所が、もしナザレの町の近くにある唯一の崖でなかったならば、重要ではなかったでしょう。イエスはナザレではなく、ベツレヘムで生まれました。聖書によると、彼はダビデの町で生まれなければならず、ベツレヘム・エフラタで生まれなければなりません。ミカ書第5章にある預言者ミカの言葉が成就されるためでした。イエスご自身が「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する（ルカの福音書24:44）」と言われました。ですから、彼はベツレヘムで生まれなければなりません。しかし、赤ん坊だったイエスがどのように成長し、やがて大人になって驚くべきミニストリーを開始したかという事になると、預言者イザヤは、全く異なった事を語っています。聖書には、イザヤ書11章にこう書かれています。

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。（イザヤ書11:1）」

これには驚かされます。というのは、「枝（若枝）」というヘブル語は「ネツェル」で、これがナザレという名前の語根そのものなのです。ヘブル語でこの聖句をお読みします。

וְיִצְא חֹטֶר, מִגֹּזַע יֵשׁוּ; וְיִצְרָ, מִשְׁרָשׁוֹי יְפָרָה.

(wə·yā·šā ḥō·ṭer mig·gê·za ‘yi·šāy; wə·nê·šer miš·šā·rā·šāw yip·reh)

「ネツェル」、その枝はもちろん、他にもないメシヤを暗示しています。イザヤ書を読むと、最初は枝のことが書かれています。しかし、聖書を深く研究すると、その枝がただの植物ではなく、ある人物であることがはっきりと分かります。ものすごく特別な人物です。イザヤ書第11章を読んでみましょう。

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。（イザヤ書11:1-4）」

ここには、非常に重要な人物のことが描かれています。彼は、驚くばかりの恵みと憐れみをもって、癒しを語り、憐れみを語り、虐げられている人たちに解放を語りに来られるだけでなく、その方はまたいつの日か、世を裁き、くちびるの息で彼のすべての敵を殺すために来られるのです。聖書の中で、唯一、二度にわたって来られる人物です。一度目は世を救うため。虐げられている者たちを解放し、目の見えない人たちの目を開くため。二度目は裁きを行い、統治するため。それはもちろん、他でもないメシヤ、イエスです。

ナザレは、もともとはイザヤ書11章で与えられた言葉を名前として与えられました。そして第61章では、第一人称でイエスがご自身のことを語っています。

「神である主の霊が、わたしの上にある。(イザヤ書61:1)」ですから、イエスがナザレで会堂に入られた際、イザヤ書を手渡され、イエスが選んで読まれた箇所が第61章であったことは、そんなに驚くに当たらないのです。ルカの福音書4章16節に、次のように書かれています。

「それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおり安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた。(ルカの福音書4:16)」

世界中には、イエスが本当はユダヤ人ではなかったと思っている人たちが大勢います。おもしろいですね。実際私は、ワシントンDCのあるアフリカ系アメリカ人牧師が、イエスはパレスチナ人であったと説教しているのを聞いたことがあります。私の知る限りでは、この特別な聖句からすると、イエスはユダヤ人であったばかりか、「安息日に会堂にはいり、朗読しようとして立たれた(ルカの福音書4:16)」と記されています。そして、それは「いつものとおり」のことだったのです。イエスは、ダビデの家から生まれたばかりでなく、ユダ部族のユダヤ人として生まれました。安息日を守り、会堂での集会に参加し、預言者の書から朗読する——これはユダヤ人のすることでした。そしてそれが習慣であったのなら、彼に従ったユダヤ人たちも、他の場所からイエスに従った人たち、異教の異邦人たちでさえも、イエスのルーツがユダヤにあったことを決して疑わなかったことは明らかです。

「すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を見つけられた。『わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。』(ルカの福音書4:17-19)」

聖書には、「今、私はここに来ております。巻き物の書に私のことが書いてあります(詩篇40:7)」とあります。エレミヤ書第36章、詩篇第40章、またエゼキエル書第2章でも、巻き物の書のこと触れられています。それは何か独特で、何か預言的なものです。

イエスはここで、ご自分の町の人々に語っています。それは小さな町でした。ナザレはとても小さかったので、カナ出身のナタナエルは本当に純真な気持ちから「ナザレから何の良いものが出るだろう」と尋ねました。それは軽蔑的な表現ではなく、単なる問いでした。15~20の家族から成る町。その人々の多くは、ものすごく宗教熱心でしたが、同時に心や思いは非常に腐敗していました。その場所から何の良いものが出るのでしょうか。

歴史家ヨセフス・フラウィウスがその書の中で言及した、ガリラヤ地方の町や村のリストにも入っていないような、全く取るに足りないような、重要でない、小さな町でした。「ナザ

レから何の良いものが出るだろう。」故郷に戻ってきて、通い慣れていた会堂に入り、イザヤ書を手渡されたイエスは、ご自身について、メシヤに関する預言の言葉を読まれました。それがイエスご自身についてのことだと、どうして分かるのでしょうか。それはとても単純です。「イエスは書を巻き、係の者に渡してすわられた。(ルカの福音書4:20)」

ご承知のとおり、イエスがお座りになると、教えが始まります。さあ、師が、教えを始めようとしておられる瞬間です。イエスは座られました。そして聖書にはこう記されています。

「会堂にいるみな目の目がイエスに注がれた。(ルカの福音書4:20)」

全員に用意ができていました。イエスが会堂に入って来られる前に、すでに皆は用意ができていました。カペナウムや他の場所でイエスがなされたことを知っていたので、期待が高まっていたのです。イエスが教えようとしています。今にも口を開かれようとしています。知恵と恵みの言葉を語ろうとしておられます。

「イエスは人々にこう言って話し始められた。『きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。』(ルカの福音書4:21)」

イエスが明確に示されたのです。彼こそが、その上に主の御霊がおられる方であり、貧しい人々に福音を伝えるために来られた方であり、心の傷ついた者をいやすために遣わされた方なのです。イエスは言われました。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」

誰もそれに反対しませんでした。誰も反対する人がいなかったのは、彼らのメシヤ観が、メシヤとは、彼らを別の抑圧から解放してくれる、神によって油注がれた、血と肉を持った人間であるというものだったからです。興味深いのは、イエスがこう語られた時のことが、聖書に次のように記されていることです。

「みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた。(ルカの福音書4:22)」

実のところ、ナザレのユダヤ人たちは、イエスをメシヤとして受け入れたのです。問題は、メシヤに対する彼らの見解が完全に誤っていたことでした。彼らにしてみれば、「あなたが来られるならば、あなたが私たちを弾圧する者たちから救ってくれるならば、あなたがメシヤならば、あなたに従います。それならば、あなたに味方します」ということだったのです。それで、イエスはこの時点では受け入れられたのです。けれども、イエスご自身がこのすぐ後に、次のように言っています。

「イエスは言われた。『きっとあなたがたは、「医者よ。自分を直せ。」というたとえを引いて、カペナウムで行なわれたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ、と言うでしょう。』また、こう言われた。『まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません。(ルカの福音書4:23-24)」

人々は独自の条件に基づいてイエスを受け入れました。しかし、イエスは彼らに「預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません」と告げられました。ということは、イエスは、彼らがイエスが本当はどういう者かを理解したら、ご自身を受け入れないだろうと予告されたのです。

実際に、彼らはイエスを拒むことになります。私は今、海拔1300フィート(396m)にあるあの崖の横に座っています。私の背後には、非常に深い溪谷があります。これがハルマゲドンの谷です。イエスの口から真理が語られるのを聞いた人々は、彼をこの崖から突き落とすつ

もりでした。それで、イエスは、「預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません」と言われたのです。

そして続けて、預言者エリヤの時代には、イスラエルにも多くのやもめがいたが、エリヤはだれのところにも遣わされず、サレプタにいたやもめ女のもとにだけ遣わされたことをお話しになりました。サレプタは、今のレバノンのある地域にありました。そこは間違いなくイスラエルではなく、彼女は間違いなくユダヤ人ではありませんでした。また、エリヤの後継者エリシャの時代には、イスラエルには多くのらい病人がいました。エリシャはだれのところにも遣わされず、アッシリア人ナアマンのもとにだけ遣わされました。ユダヤ人ではなく、アッシリア人です。イスラエル人ではありません。エリシャが彼のところに遣わされたということは、神がかたよったことをなさないことを示しています。

神はあなたの宗教をご覧にはなりません。神はあなたの出生証明書をご覧にはなりません。神は人の心をご覧になります。

イエスはキリスト教徒ではありません。イエスはキリストです。神はユダヤ人ではありません。神は世界を創造されました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネの福音書3:16)」

ローマ軍からの弾圧や、イスラエル内にあった抑圧から救ってくれる方としてではなく、彼ら自身の罪からの救い主として、彼ら自身の邪悪な心や思いからの救い主として信じるのです。それで、ナザレのユダヤ人たちはこれらの言葉を聞くと、激怒しました。聖書にこう書かれています。

「これらのことを聞くと、会堂にいた人たちはみな、ひどく怒り、立ち上がってイエスを町の外に追い出し、町が立っていた丘のがけのふちまで連れて行き、そこから投げ落とそうとした。しかしイエスは、彼らの真ん中を通り抜けて、行ってしまわれた。(ルカの福音書4:28-30)」

イエスは彼らを非難されませんでした。イエスは彼らを叱責されませんでした。イエスは彼らを呪われませんでした。イエスは、ただ、彼らのご自身をなじるであろうと予告されました。ユダヤ教のみならず、世界中のすべての宗教は、人が神に到達するための土台を、良い行いや人間の努力に置き、自らの功績や良い業によって救いを正当化しようとします。つまり、イエスは、ナザレの人々に、「ユダヤ人であることは天国に入るための保障ではない」と告げられました。「それは永遠のいのちへの近道ではなく、サレプタのやもめ女や、アッシリア人ナアマンと全く同じように、あなたがたにも救い主が必要である」と。「あなたがたは皆、癒しを必要としており、あなた方には皆、救い主が必要である」と。

ナザレの人々には二つの問題点がありました。一つ目は彼らのメシヤ観、二つ目は彼らの自己認識でした。ユダヤ人の伝統によると、メシヤは血と肉を持った人間で、イスラエルを弾圧する者の手から救ってくれ、平和と繁栄の時代をもたらすことになっています。そのため、ユダヤ人たちは長年にわたって、いつも間違ったメシヤを選んできたのです。イエスを拒んでからほぼ100年後に、彼らはバルコクバと呼ばれた人物を新しく容認しました。結局、彼はメシヤではありませんでしたし、それどころか、イスラエルの状態をもっとひどいものにしてしまいました。イスラエルはもはや「イスラエル」という名ではなくなり、エルサレムはローマによって完全に破壊され、この地にはパレスチナという名が与えられました。メシヤ

がただの人間であるとは、聖書のどこにも示唆されていません。聖書は何度も、メシヤが神の子であることを告げています。イザヤ書には、「ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。(イザヤ書9:6)」とありますし、箴言30章には、「その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。(箴言30:4)」とあります。

聖書は、その日が来ると、神はイスラエルに新しい契約を与えると告げています。エレミヤ書31章31節では、その新しい契約はモーセの律法に基づくものとはならないと示唆されています。モーセの律法はイスラエルの民によって破られました。それを成就することは不可能だったからです。イエスは律法を成就されました。それによって、他のだれにも、律法を成就する必要はなくなりました。イエスは完全に律法を全うされたのです。イエスによる以外には、神のもとに行く術はありません。イエスはユダヤ人たちにおっしゃいました。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネの福音書14:6)」

しかし、ナザレに住んでいたユダヤ人たちはそれを全く誤解していました。それは完全に曲解されたのです。イザヤ書29章16節にこうあります。

「ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよかろうか。造られた者が、それを造った者に、『彼は私を造らなかつた。』と言い、陶器が陶器師に、『彼はわからずやだ。』と言えようか。(イザヤ書29:16)」

果たして、肉として現れた神であるイエス、神のことばであるイエスが、神のことば、神の律法を犯したと非難されうるのでしょうか。確かに、彼らは逆に考えてしまいました。ナザレの人々は、宗教的な人々の代表にすぎません。ユダヤ教でも、カトリックでも、イスラム教でも、ヒンドゥー教でも、何教でも関係ありません。誰でも、宗教にしがみついている人たちは、最終的に間違った結論に達するのです。イエスは人々にこうおっしゃっているのです。「あなたが何者であるかは重要ではありません。わたしが何者かということなのです。」イエスは、彼らをご覧になって憐れまれました。イザヤ書29章13節にこう記されています。

「そこで主は仰せられた。『この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれたことにすぎない。(イザヤ書29:13)」

神は、宗教には関心を持っておられません。神は、関係に関心を持っておられます。そうです。彼らはすっかり勘違いしていました。メシヤが、血と肉を持ったただの人間であるという認識は、完全に間違っていました。そのため、彼らはイエスを冒瀆の罪で非難しました。彼らがイエスを十字架にかけたのは、イエスがメシヤだと自称したからではありません。彼らがイエスを十字架にかけたのは、イエスが「わたしと父とは一つです(ヨハネの福音書10:30)」と言って、自らを神と等しくしたからでした。それが、メシヤに関する理解において、ユダヤ人が今日まで持ち続けている問題なのです。しかし、旧約聖書の全体を通して、私たちに、メシヤが世界の基の築かれる前から存在していたことが分かります。彼は創造主の側に属しており、決して、被造物の一つではありません。

神は、宗教には関心を持っておられません。あなたの心が神に向けられていなければ、あなたが安息日や、祭日や、新月を守っても、神に近づくことは出来ません。イザヤが、イザヤ書1章でそれを見事に語っています。確かに厳しい言葉ではありますが、それは耳に入れられ、教えられなければならないものです。イザヤはイスラエルの民に向かって言います。

『あなたがたの多くのいけにえは、わたしに何になろう。』と、主は仰せられる。『わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよ、とあなたがたに求めたのか。もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙——それもわたしの忌みきらいのもの。新月の祭りや安息日——会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。(イザヤ書1:11-15)』

では、どうすればいいのでしょうか。

「洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。』『さあ、来たれ。論じ合おう。』と主は仰せられる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、この国の良い物を食べる事ができる。(イザヤ書1:16-19)」

人々は、イエスについて、またメシヤについて、誤った認識をしていただけでなく、自分たち自身についても誤った認識をしていました。ユダヤ人であるだけで大丈夫だと思っていたのです。安息日を守り、新月を守り、祭日を守り、いけにえを携えてきて、両腕を広げて祈る。ユダヤ人が行うことを、規則に従ってやっていたら大丈夫だと思っていたのです。しかし、イエスは来られて、彼らの偽善の仮面をはがし、宗教ではなく、関係が答えなのだと言われたのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネの福音書3:16)」